

「御靈」のゆくえ

人が亡くなると、故人の御靈はどこに行くのでしょうか。

これは日本人が古の時から今日にいたるまで、抱いてきた問いです。神話の中では高天原、黄泉の国、根の国など、さまざまな表現で語られてきました。

例えば御靈は遠いどこかに行くのではなく、ただそばにとどまり続けると考えられるのが幽世です。故人の御靈は私たちが会いたいと願うとき、いつでも来てくれるものだという、やさしくあたたかな捉え方です。

幽世は私たちのふるさとと生活とに繋がるところ。故人の御靈はいつも私たちのそばにあり、子孫の暮らしを見守っているのです。ですから神道では故人が亡くなつたことを「帰幽」といいます。

神葬祭の意味や儀礼を知ることで、御靈のあるところに思いを致しましょう。

神葬祭

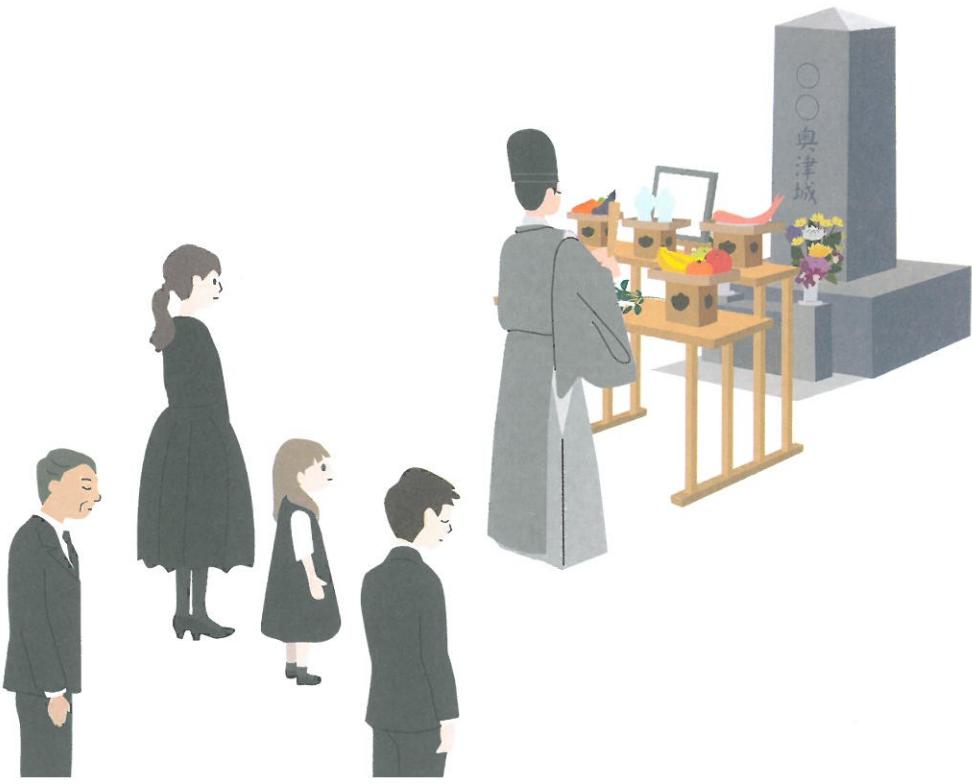
私たち命あるものは何人といえども死を免れることはできません。肉親の死などに直面した時、私は悲しみの中、故人を見送りますが、その際さまざまな儀式を行います。いうまでもなく仏教には仏教式の、キリスト教にはキリスト教式の葬儀があります。神葬祭は神道の儀礼にのつとつた葬儀で、日本固有の葬法を土台に整えられたものです。

神葬祭の特徴は、

- 厳かで慎み深く簡素である
- さまざまの制約が少なく、経済的負担が軽い
- 地域の氏神さまとの関わりをもてる
- 子孫や地域の方にも思いを引き継げる

などがあげられます。

初宮参り、七五三、季節行事など、人生のさまざまな場面で関わりのあつた氏神さまの神職に神葬祭を行つていただきことで、故人にとつての人生儀礼の最後を締めくくりましょう。



みたま

みたま